

(論文内容の要旨)

本論文は、在日コリアンの民族教育における主要な空間となっている、民族学級と民族学校で行われている実践を通じて、在日コリアンとアイデンティティの問題を分析した社会学的研究である。

序章では、本研究の目的の紹介と、在日コリアンという人間分節に関する研究者の視角(特に韓国人留学生という立場を踏まえて)について述べた。本論文の目的は、在日コリアンの民族教育を通じて、マイノリティの現実認識と実践における、本質主義を超えながらもなお脱構築されないアイデンティティの新しい可能性を探ることである。在日コリアンという人間分節に対する研究者の基本的視角は、「サバルタン的存在」としての在日コリアンである。在日コリアンにおける抑圧の歴史の終焉という言葉に対して、植民地体験の連続性と、日本と韓国・朝鮮の国民国家イデオロギーの狭間で重層的抑圧の下に置かれている在日コリアンの「サバルタン性」に注目することから議論を進める必要性を提起した。

第1章では、在日コリアンの歴史的形成過程を検討し、時代の変化につれて在日コリアンが、「ネーション」から「エスニック集団」へと変容して行く過程を追いながら、在日コリアンの現状を含めた基本的事項についての考察を試みた。そのなかでエスニック集団化したことによってもたらされた在日コリアンのアイデンティティの危機と、その代替策として現われた72年型民族学級を考察した。

第2章は、第1章で述べた72年型民族学級の現場に関するエスノグラフィである。在日コリアンのアイデンティティの危機を乗り越えるためのアイデンティティ・ポリティクスの結果として登場した新しい形の民族教育である72年型民族学級に着目した。具体的には、大阪市にある公立小学校における民族学級に関する民族誌記述とその内容分析が行われた。

第3章では、第2章の民族誌の内容である、アイデンティティ・ポリティクスとして民族教育が実践されている場を題材にして、在日コリアンの民族教育がおかれ

てきた歴史的状況についての分析と、その問題点に対する考察を試みた。その結果、民族学級型民族教育が推進した「区別の政治学」の矛盾点が明らかになった。それは、実体ではない想像上のものを志向するアイデンティティ・ポリティクスの限界を明らかにすることでもあった。その限界の上に、多くの在日コリアンは皮肉なことに「国民としての日本人」を自ら「準拠集団」として受容していく傾向があることを論証した。

第4章では、在日コリアンの民族運動と、民族教育についての共同体主義的立場と自由主義的立場がそれぞれ持つ可能性と限界の分析を試みた。時代の流れのなかで、多民族共生という自由主義的未来を志向するために、内部の共同体主義的要素（支配的文化に抵抗するための根拠でもあった）を放棄しなければならなかったコリアンの民族教育は、予期せぬ結果として、日本社会の共同体主義イデオロギーを強化することに協力することになった。このような視点から見る時、在日コリアンの多民族共生志向民族教育は自家撞着に陥っていることがわかる。そこに朝鮮学校の共同体主義的教育実践を再考する根拠が見出される。サバルタンとしての在日コリアンにとっての社会的主体生成装置として、朝鮮学校という場(champ)が現代的意義をおびてくる。

第5章では、日本の教育システムから完全に分離された朝鮮学校という分離主義的教育空間がいかにして作られたかを歴史社会学的に検証することを試みた。朝鮮学校という分離主義の空間は、北朝鮮という国家による企画の産物と誤解されることが多いが、この「空間」の誕生の過程には、戦前から活動していた朝鮮人プロレタリア国際主義者たちの挑戦と挫折という苦難の歴史があった。1955年の総聯の誕生にはそのような背景があった。こうした背景をもとに、民族学校建設における北朝鮮からの経済的援助が、その後の総聯と朝鮮学校の方向性を定めていった。しかし、このような状況は、日本の国家権力による政治的干渉からの自治が一定程度保証され、また自由な教育実践が行われる分離主義的教育空間の存在を可能にし、朝鮮学校の物理的環境を形成していった。

第6章では、主要フィールドであった2つの朝鮮学校を中心に民族誌的記述を通

じて、朝鮮学校の教育実践に関する考察を試みた。朝鮮学校は、日本にありながら、北朝鮮という国家の影響下におかれている一種の「国家のイデオロギー装置」と捉えることもできるし、本質主義に基づいた集団主義の規律と訓育の抑圧的注入機関として表象することもできる。しかし、本論文は朝鮮学校を教員と生徒を含め、その構成員が「朝鮮学校」という「場」に日々参加し共に「民族を実践」していく「実践共同体」と捉える枠組みを提案した。この視点から朝鮮学校で行われる「実践」を観察してみると、朝鮮学校における本質主義的かつ全体主義的レトリックと実践の裏に隠されている「個人」が見えてくる。このような二重性は、朝鮮語と日本語に分けられた朝鮮学校の言語実践のなかにおいてもっとも明確に観察される。

第7章では、朝鮮学校における朝鮮語教育の特殊性について考察した。朝鮮学校における言語実践の実態を検証することを通して、母語である日本語と二次学習言語としての朝鮮語の間に存在する言語的干渉現象と、両言語における「シニフィエ」の偶然な類似による「意味の滑り落ち」効果を発見した。このような現象は朝鮮学校独自の文化を作りながら、本質として民族と祖国が語られている抑圧的な教育過程のなかに、ある種の「出口」を個人に与えてくれた。また、学校における公式言語が朝鮮語であるため、朝鮮学校で行われている実践は、必然的に演劇性を帯びる。この演劇性に注目してみると、朝鮮学校の生徒と教員は朝鮮語と日本語で構築された世界を、自由に行き来しながら、対面的状況におけるアイデンティティ管理を実践していく様子がわかってくる。朝鮮学校の生徒や卒業生が示す状況に応じた自在な通名使用は、このような管理能力から生成されるものである。

終章では、第6、7章の朝鮮学校の民族誌の分析を通じて、朝鮮学校における集団主義と個人主義の共存や本質主義に基づいた国家主義言説と脱国家・民族主義的実践の共存のような、一見矛盾しているように見える諸要素が、実は演劇性と二重的言語実践による「現実の生の技法」によって巧みに統合されていることを明らかにした。このような認識構造は、戦略的に本質主義に頼らざるを得なかったアイデンティティ・ポリティクスの行き詰まりを回避するための手がかりを与えてくれる。つまりアイデンティティをめぐる戦略的本質主義の落とし穴を避けながら、個人的

次元へと（自由主義的に）脱構築されることをも避けることができる、責任性（能動的意図）のある主体（エイジェンシー）によるアイデンティティの管理能力である。朝鮮学校の現場から見出した「アイデンティティ・マネジメント」は、単なる「戦略」を超えて、「生の技法」に近いものであり、その技法は、朝鮮学校という現実空間の実在性とそこにおける個人の実践によって日々更新されているのである。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、これまで調査することが困難だった朝鮮学校を対象に、そこで生成されるエスニシティとアイデンティティの可能性を「発見」した独創性にあふれた社会学的論考である。本論文はまた、2001年から2005年にかけて断続的に37カ月におよぶ長期のフィールド調査にもとづき作成された精密で貴重なモノグラフでもある。

本論の社会学的意義は以下の点に要約される。在日コリアンのエスニシティ研究については、1970年代以降、おびただしい研究群が出現してきたが、そこでは二つの視座が主要な理論枠組として確立していた。一つは、1970年代から80年代にかけて支配的であった民族を本質主義的に捉える視座である。そこでは、日本社会からの差別と排除に抗して、自らの尊厳を確保するための連帯の基盤として、エスニシティは位置づけられた。これに対して、1990年代になると、こうした民族の捉え方を、本質主義の罫として批判的にとらえ、より個的なアイデンティティを肯定的に評価する視座が台頭していった。これがもう一つの構築主義的視座である。本質化された民族が内包している女性差別などの抑圧構造を暴露し、より柔軟で浮遊するアイデンティティに着目するこの構築主義的視座は、在日コリアン研究にパラダイムシフトをもたらすものであった。

本論文は、これら2つの視座のもつ限界を乗り越え、21世紀の在日コリアンが実践するエスニシティとアイデンティティの新たな方向性を、朝鮮学校という空間に見だし、評価し、解明しようとする挑戦的な試みである。

本論文が、まずとりあげるのは、民族学級という空間である。民族学級は、コリアン・エスニシティを戦術的であれ本質化することで、在日コリアンの若い世代に肯定的アイデンティティを与えようとする場として位置づけられた。筆者は、1950年代および1970年代に設けられ、それぞれの時代背景をもつ民族学級におけるフィールドワークを通して、民族学級で生成されるエスニシティとアイデンティティを、

「アイデンティティ・ポリティクス」の限界として捉えて批判する。それは以下のような批判である。ホスト社会がエスニック・マイノリティに与える障害や困難に対応するために、コリアンは日本人との差異（区別）を設定し強調することで、自らの生を肯定し誇りを回復しようとした。しかし、こうした差異化とそれによってつくられたカテゴリー内の共同性の強化は、ホスト社会自体のカテゴリー内共同性を強化するために、結果として、マイノリティに対する差別や排除はより強化される。こうして強まる障害に対抗するために、マイノリティはさらに区別を強め、誇りを維持しようとする。本論文は、こうしたアイデンティティ・ポリティクスが内包する悪循環が、民族学級において現象していることを指摘し、民族学級型のエスニシティとアイデンティティの将来に疑問を投げかけた。

このような批判を最初に提起したのは、在日朝鮮人 2.5 世の教育社会学者金泰泳だった。金は、この限界を乗り越える実践として「在日コリアン子ども会」を事例にして、民族というカテゴリーにとらわれない、個的で柔軟なエスニシティとアイデンティティに注目した。しかし本論は、こうした金の視座に対しても問題点を指摘する。柔軟で浮遊するアイデンティティが、現実には「新自由主義的アイデンティティ」として機能しており、在日コリアンのもっている歴史的位相（本論ではこれを postcoloniality と呼ぶ）と、それに関連する暴力的排除と迫害の組織的・制度的実態を視野の外側においやってしまったというのである。そこで本論は、「アイデンティティ・ポリティクス」でも「アイデンティティ・ポリティクスを超えて」でもない、在日コリアンのエスニシティとアイデンティティのあり方の可能性を、朝鮮学校における実践のなかに見出そうとする。

朝鮮学校は、これまで画一的で本質主義的民族観を植え付け、個人崇拝とイデオロギー教育を実施する場として一面的に表象され非難されてきた。しかし本論は、朝鮮学校における長期の参与観察を通して、朝鮮学校を民族に関する「実践共同体」と捉える見方を提唱し、それに基づいて、エスニシティとアイデンティティが「演劇的」に実践され「演技」として身体化されていく過程を詳細に描き出すことによって、朝鮮学校に対する一面的批判に反論する。朝鮮学校内では日本語使用を厳しく

統制している（誤って日本語使用をした生徒にはそれを教室内の「日本語ごみ箱」に捨てさせるというシステムまで採用している）。朝鮮学校の生徒が、校門を出ると、自由にそして堂々と通名と日本語を使用する状況は、通名をめぐる苦悩しつづけた民族学級や民族子供会の生徒とは対照的である。この対応の違いのなかに、筆者は朝鮮学校の演劇性を読み取る。そして、アイデンティティ・ポリティクスという問題設定ではなく、それを演じ鑑賞し操作するという意味で、アイデンティティ・マネジメントという問題設定を提唱し、その有効性を朝鮮人学校における生徒、教員、保護者が行う実践の詳細な吟味を通して実証してみせたのである。

方法論的にみると、韓国からの留学生が北朝鮮系の教育機関に長期間参与観察を実施したという点において、本研究の独創性は特筆に値する。韓国では今日なお、北朝鮮関係者との直接的な接触は困難な現実がある。こうした状況のなかで行われたフィールド調査は、韓国社会にとっても、またこの調査を許容した在日朝鮮人社会にとっても、画期的な意味をもつものとなるだろう。さらに付け加えるならば、教科カリキュラムや放課後の雑談、課外活動の分析から学校運営の問題点まで、生徒、教員、保護者へのインタビューや映像分析を通して、これまで明らかにされてこなかった朝鮮学校の実相を詳細に考察した点で、本論文は、朝鮮学校の実像を内側から多面的に描いたエスノグラフィとしてきわめて貴重な研究であると評価できる。

とはいえ本論に問題がないわけではない。エスニシティとアイデンティティ創出をめぐる民族学級型と民族学校型の評価と限界の検討がやや一面的で図式的である点や、朝鮮学校のアイデンティティ・マネジメントの論証が、事例・エピソードに依存しすぎており論理的検証が充分とはいえない点などは今後の課題である。しかし、こうした弱点も本論の意義を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年11月9日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。